18.1±8.2 ng/m*l* であったのに対し，血栓症，動脈硬化症，早期の DIC，さらに真性多血症や CML などの症例では有意の高値を示した．このことより，これら疾患において β-TG 値測定は疑固亢進状態を検する一指標としての有用性を示す成績を得た．

44. 血漿ベータートロンボグロブリン測定用試薬の検討と臨床的有用性について

小川　正　金尾　啓右
本田　稔　石原　静
（住友）

血漿ベータートロンボグロブリン(β-TG)の採血ならびに測定条件に関する検討を行ない，種々臨床例において β-TG 値の検討を行なった．乏血小板血漿の作製は，低温かつ短時間処理の必要性を認めた．なお，測定には β-Thromboglobrin Riapac を使用し，intraassay error 4.4%，interassay error 10.5%，回収率，97.9%と良好であった．

β-TG と血小板第4因子の間には r=0.67 の正の相関を見た．

17例の健常例の血漿 β-TG 値は平均 30.4±15.2 ng/m*l* であった．これに反し血栓性静脈炎では，151.9±35 ng/m*l*，脳梗塞では 137.3±61.4 ng/m*l*，動脈硬化性動脈閉塞症では 147.9±46.3 ng/m*l* といずれも高値を呈した．糖尿病97例では，平均 82.9±65.7 ng/m*l* と統計学的には健常例に比べ，有意に高かったが，正常値とのかさなりも多く見られた．なお糖尿病コントロールの良，不良，細小血管症の有，無では，有意差を見なかった．

さらに，1例の深部血栓静脈症では，その臨床経過と β-TG 値がよく一致した．

45. CG, SLCG radioimmunoassay の基礎的および臨床的検討

木戸　亮　福地　稔
森田　俊孝　西川　彰治
木谷　仁昭　中原　啓
佐竹　秀逸　永井　清保
（兵庫医大・RI）

Cholylglycine (CG) と Sulfolithocholylglycine (SLCG) の radioimmunoassay の基礎的ならびに臨床的検討を行なった．

異なる10回の測定で得られた標準曲線の検討では，安定性，再現性共に満足できる結果であった．Incubation 温度の検討では，CG では高温となる程低濃度領域で B% が低下し，逆に SLCG では高くなる成績であった．Incubation 時間の検討では，CG, SLCG 共に検討範囲内では有意の差異は認められなかった．Interassay および Intraassay における再現性は，CG でおのおの平均 3.2%，11.8%，SLCG で平均 3.5%，9.2% であった．血清試料に既知量の CG または SLCG を添加した際の回収率は，CG で平均 104.8%，SLCG で平均 101.7% であった．血清試料を希釈した際の希釈曲線は，CG および SLCG 共におのおのの標準曲線と平行性を示すことが確められた．臨床応用の成績では，健常人10例の空腹時血中 CG および SLCG はおのおの 16.5±7.8 μg/d*l*，26.7±15.1 μg/d*l* で，これに対し96例の各種疾患では，肝細胞障害が強いほど CG, SLCG 共に高値を示す傾向が得られたが，亜急性肝炎，高度の閉塞性黄疸および先天性胆道拡張症では，SLCG は著しく低値を示した．

Presented by Medical*Online